

水俣病の歴史の中の忘れられない1日

2013年10月27日。天皇皇后が水俣を訪問した。そこで水俣病患者との歴史的な対話を実現する。背後にはいったい何があったのか。著者は、水俣病をめぐる闘争の軌跡をたどりながら、その日の真相に迫る。

天皇皇后の水俣訪問は「異例づくし」だった。まず、日程にあげられていなかった胎児性患者との面会が実現する。両者を結びつけたのは石牟礼いしむれ道子。『苦海浄土』で水俣病を描いた作家だ。

皇后と石牟礼は鶴見和子を偲しのぶ山百合やまゆり忌で出会い、心を通わせる。この席で、皇后が「こんど水俣に行きます」と告げると、後日、石牟礼は手紙に「水俣では、胎児性水俣病の人たちに、ぜひお会いください」と綴った。皇后の強い意向で、急遽きゅうきよ、面会が実現する。ただしすべて秘密。当事者は、このことを口外しないよう、役人から強く求められた。

天皇皇后はやさしく声をかけ、苦労をねぎらった。そして患者の声を丁寧に聞いた。同席した支援施設「ほっとはうす」の加藤タケ子は、患者と共に涙を流した。「ずっと見ていてくださったんだなあ、忘れられていなかったんだなあ、といううれしさでしょうか」

面会后、役人から「夢のなかの話にしておいてくださいね」と言われたが、すぐに秘密は公然のものとなる。天皇皇后自らが、多くの人の前で患者と面会したことを話したからだ。著者はここに「秘密の話にさせたくなかった」という天皇皇后の意志を読みとく。

この後、水俣病資料館「語り部の会」会長・緒方正実が二人に向けて講話を行った。話が終わると、天皇は思いがけない行動をとった。緒方の顔をじっと見つめ、予定にはなかった「お言葉」を述べた。**天皇は「今後の日本が、自分が正しくあることができる社会になっていく、そうなればと思っています」と言及した。**ここには慎重な言い回しながら、国の姿勢に対する批判が込められていたと著者は見る。

この後も、異例の行動が続く。侍従が「お時間です」と声をかけても、天皇皇后は、その場を立ち去ろうとしない。その場のひとりひとりに声をかけ、耳を傾けた。患者たちは「はじめて心から救われたような気持ちに満たされた」という。著者曰く「困窮と毒苦に出しきれぬ声であえぎつつ、心の底から彼らが求めていたのは金などではなく、真情を抱きしめてくれる人間の『言葉』だったのだ」。

人間は言葉の動物だ。言葉が人を動かし、人を形成する。そして、言葉は行動と不可分のものである。天皇皇后が患者たちの心をとらえたのは、その態度や姿勢、表情が言葉以上の言葉となっていたからである。

加害企業チッソに対して、直接交渉を求めた川本輝夫は、「サシ」で話をすることにこだわった。何とかして被害者の痛みを「わからせたい」と思っていたからだ。しかし、チッソの責任者は逃げ続けた。川本はそのたびに悔し涙を流した。

天皇皇后は、「サシ」で患者たちと向き合った。亡くなった川本の妻と息子とも言葉を交わした。ここに救いの光が射きし込む。

許しとは何か。救済とは何か。天皇皇后とはいかなる存在なのか。

水俣病は終わっていない。感動的な話を、都合のいい幕引きに流用してはならない。しかし、水俣病の歴史の中で、この日は特別な意味を持ち続けるだろう。被害者たちにとって、忘れられない日となるだろう。

翌年1月、次のような天皇御製ぎよせいが発表された。「慰霊碑の先に広がる水俣の海青くして静かなりけり」

天皇もあの日を忘れていない。

～この文書は、

<天皇・皇后ご夫妻の「生命・環境・人権よりも経済・軍事・統制を優先する」動きとの闘い> (下記URLをクリックしてください)

に掲載されているものです。～